



# 見て、読んで、感じて、みんなの思い、考えを!!

## ～道徳教育推進校の取組から～



### 「『心と心のつながり』を道徳科の授業で考える」

猪苗代町立長瀬小学校

リハビリのために荷物を持って歩く練習をしているおばあさんに対し、荷物をもってあげる親切とそっと見守る親切のどちらが本当の親切なのかを子どもたちに投げかけました。子どもたちは、黒板に書かれた心のものさしを見つめながら、自分の気持ちはどのあたりなのかを考え、葛藤しながらネームプレートを貼りました。その後、子どもたちは、友達と話し合い、親切な行為をめぐって何が大切なことなのか真剣に考えていました。本校では、話し合いの後、もう一度色違いのネームプレートを貼らせることにより、心の変容を視覚的にとらえやすくしています。また、道徳科の学びを充実させるため、発問や教師のコーディネートの実践的な在り方を実践的に研究しています。



### 「南会津の伝統文化を学ぶ」

南会津町立田島小学校

南会津町田島地域では、毎年7月22日～24日「田島祇園祭」が盛大に行われ、屋台で子ども歌舞伎が上演されます。しかし7～8年前、少子化による担い手不足のため上演が困難な状況になりました。「伝統文化を継承していきたい」という地域の思いを受け、町教育委員会生涯学習課と本校で連携し、3学年総合的な学習の時間での子ども歌舞伎の学習が5年前から開始されました。写真は前年度12月に学習の成果を発表した「第5回屋台歌舞伎特別公演」の一場面です。学習の成果を生かし今年の田島祇園祭でも各地区の指導者の下、子ども歌舞伎の上演が行われました。



### 「思いやりと感謝について考える」

泉崎村立泉崎中学校

本校は、週1時間の道徳科の授業をしっかりと積み重ね、生徒一人一人の道徳的な成長を支援したいと考え、授業の充実と改善を図ってきました。中学校第2学年の授業では、東日本大震災で被災した500人を無償で自分が経営する旅館に招いた父と、家族や従業員のことも考えて父に反発する兄のどちらの立場に自分の考えは近いかについて考えた後、今後、兄はどうするか、と問いかけ、小グループをつくって話し合いました。「嫌々だけど認める」「父親の思いに触れ、被災した人のために一生懸命に働く」など様々な意見が出され、3人1組の小グループでの学習を継続的に取り入れたことで多面的・多角的に考える姿が見られるようになってきました。

## 互いのよさを認め、尊重し合う子どもの育成 ～会津坂下町の取組

会津坂下町は、昨年度から2年間、県教育委員会の委託を受け、幼稚園、小・中学校、家庭、地域の連携を生かして、「自分のよさも大切にしながら、他の人のよさを大切にしよう」をテーマに、人権教育の実践的研究に取り組んでいます。去る11月28日に行われた坂下中学校の人権教育研究発表会で、道徳科の授業を公開した先生に、授業を行った感想をうかがってみました。

### 「人権感覚を育てる道徳科の授業と学級づくり」

今年度は、「自分も他の人も大切に授業」を実践するために、「5つのK」【 活躍させる /  共感・共有させる /  比べさせる /  決定させる /  声を出させる】を大事にした授業研究を町全体で進めています。道徳科では、人権が尊重される授業づくりの「自己存在感」「共感的人間関係の育成」「自己選択・自己決定」の3つの視点すべてに「5つのK」が関連するため、これを適切に実践し、人間としての生き方について考えを深める学習を通して、人権感覚の育成を図りました。特に、思考ツールを用いて思考の可視化を図り、互いの考えのよさや違いを認め、共有させたことにより、よりよい生き方を考えさせることができました。また、こうした授業の土台として、「相互に尊重し合える学習集団」を目標に、よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート分析も生かしながら学級づくりを行ってきました。「全員が自分を表現し、違いを認めている。」そんな成長を実感しました。

会津坂下町立坂下中学校 橋谷田 亨



※思考ツール：様々な意見を整理したり、新しいアイデアを出したりするなど、思考する際に活用する様々な手法の総称

## 【特集】自分らしく生きる よりよく生きる

# 10代の君への手紙 ～「心」と「頭」と「体」を鍛えて…素敵な恋をしよう!～

## ～県立安達高等学校（県北地区道徳教育推進校）の講演から～

本年度の県北地区道徳教育推進校である県立安達高等学校は、県内唯一のユネスコスクールとして、「持続可能な開発のための教育（ESD）」を中心に据えて教育活動に取り組んでおり、それらの活動と道徳教育の関連を大切に道徳教育を進めています。

昨年11月、同校において、県北地区道徳教育地区別推進協議会が開催され、生徒や保護者、地域の方々、県北地区の小・中・高等学校の教員を対象に、視覚障がいのある地元出身の渡邊健氏による講演会が開催されました。



### 渡邊 健 氏の講演の内容

私たちが生きていく上で大切なこと。それは、「心、頭、体」です。  
 「心」とは、希望、夢、願いといったポジティブな思いを意味します。こうなりたい、自分はこれがしたい…。希望、夢、願いは心のエネルギーそのものです。  
 「頭」は学びを意味します。新しいことを知りたり身につけたりすることは、それを知らずに生きていくことよりもはるかに人生を豊かにしてくれます。  
 「体」とは健康を意味します。心や頭を鍛えるためには、そもそも丈夫な体なくしては実現しません。  
 これは車と同じです。丈夫なボディ(体)に空気一杯詰まった右のタイヤ(心)と左のタイヤ(頭)がしっかり付いている車(自分自身)。三つが充実していて初めて車(自分自身)は行きたい方向へとまっすぐ進みます。まっすぐに進んでいくと、その先には必ず出会いが待っています。その出会いは偶然でしょうか?いいえ、そもそも自分が前を向いていないれば出会いは成立しません。そういう意味では、出会いは偶然という名の必然です。そして、その出会いが奇跡を起こすのです。  
 「心、頭、体」をしっかり鍛えて、前を向いて、進んで行きましょう。あなたの進む先には、奇跡を起こす素敵な出会いが必ずあります。



**渡邊 健 氏**  
 福島県内で23年間教職に携わったあと、視覚障がい为重篤化したため、二本松市立二本松第三中学校を最後に退職。その後、県立盲学校専攻科理療科に入学。その後三つの国家資格を取得。平成27年度全国盲学校弁論大会で最優秀賞に輝く。現在は、筑波技術大学大学院に通いながら、福島県内で講演活動も行っている。

### この講演に込めた思いや願いを渡邊氏にうかがいました。

手引きしてもらって入場し、手を貸してもらいながら講演を行いました。障がいがある私だからではなく、人間はみんな周りに助けられながら生きていく。そうやって生きてきて、年を重ねて、元気でんきな大人がいることを知ってほしいんです。その「大人」は、君たちにとって信頼できる、心寄せられる存在になりたいと思っているよって、伝えられたら…。そして、「大人って楽しいよ。」だから、安心して、未来に希望をもって進んでほしい、という思いですね。  
 逆に私は、はつらつと生きていく背中を見せることで、「よし、もっとがんばろう。」って、子どもたちから大きなエネルギーをもらっています。安達高校の皆さんとの出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。

### 講演会の感想

講演会の全ての参加者が、自分のこれまでの生き方や、これからの在り方をそれぞれに見つめることができました。渡邊健氏による講演会という名の「道徳の授業」となりました。



自分にできることを「待つ」のではなく、考えて実行することが大切なのかなと考えました。今日の講演会で渡邊さんに会えてとても幸せでした。この「縁」に感謝します。  
 安達高校 1年

自分のことを客観的に見て、どんなことが足りないか、何ができていないのかを探してみたいと思いました。自分の将来に希望と夢をもって、強く、元気に生きていきたいです。  
 安達高校 2年

私はもっと私らしくいいのだと思えました。つらいこと、苦しいこと、目の前を高い壁で立ちふさがれることがあっても、「出会い」のために、私らしく、しっかりと2本の足で進んでいきたいです。  
 安達高校 3年

年齢を重ねるほど実感してしまう“知っているつもり”。自分自身も心当たりがあったゆえに、新たな出会いのためにも常に新鮮な気持ちを意識して、前を向いていきたいと思いました。 福島市 小学校教諭

「自分は教員を辞めることになってしまったが、だからこそ、今日みんなに出会うことができました。」という言葉が心に残りました。私も、これまでに出会った子どもたちのことを思い出しました。 伊達市 小学校教諭





# 「モラル・エッセイ」コンテスト最優秀作品

県教育委員会では、毎年「モラル・エッセイ」コンテストを行っています。今回紹介するのは、令和元年度の部門別最優秀作品です。次は、みなさんの心温まる体験談やすてきなエピソードを、是非お聞かせください。

## \* 中学生の部 「大切なもの」

福島県立会津学鳳中学校 2年 加藤 碧唯

私は、幼い頃から母にお金では買えない大切な物があると言われてきた。最近、その言葉の意味を考えてみた。

私は、よく友達や周りの人から一人っ子だから何でも買ってもらえて、食べ物も着る物も一人占めできていいよねと言われる。でも、私の母はとても厳しく、「常に物や人を大事にしろ」「食べ物も残さず食べなさい」など、とても口うるさい。

私が小学校の時の体操着袋、靴入れ、道具入れ、筆箱は全部母の手作りだった。低学年のうちは全然気にならなかったけど、高学年になるにつれて、その手作り感やリサイクル感をとても恥ずかしく思い、五年生の時に母の手作りの物を持ってるのは私だけだったので、キャラクターの付いた筆箱が欲しいと私は母に言った。すると母は、小さい頃に着ていた服を再利用し、その上に私の好きなキャラクターをフェルトで刺しゅうをして筆箱を作ってくれた。

私の誕生日、母は私にそれを手渡ししながら、「誕生日おめでとう。お金を出せば何でも買えるけど、この筆箱はママの手作りだから世界に一つしかないよ。」と言って、私が喜び姿を待っているかのように笑顔だったことを覚えている。私も包みを開けた時、心の中で「すごい上手、かわいい。」と感動して、すごくうれしかったが素直に喜べずにいた。そして、その日、祖父は私に手紙を届けに来た。開けてみると、メモ用紙のようなものに、「おお、たんじょうびおめでとう。じい」と書いてあった。祖父は八十才を過ぎてからはほとんど字も書けなくなり、何を書くにも母に頼んでいるのに、私のために一生懸命書いてくれたのだ。その姿を想像したら涙がポロポロこぼれ落ち、うれしくてたまらなかったことを今もはっきり覚えている。母の愛情たっぷりの筆箱も祖父の手紙も、私にとってはお金では絶対買えない大切なものだ。と今、はっきり言える。そして、父・母・大好きな祖父は私の大切な宝物だ。

## \* 高校生の部 「『つながり』について考える」

県立安達高等学校 2年 根本 有夢

私は毎日、自分が暮らしていない他の町にある高校へ通っている。そのため、入学してすぐの頃は、違う町の慣れない景色に戸惑いや不安もあった。しかし、今、新しい町の人々との「つながり」によって私は楽しい学校生活を過ごすことができている。

最初に、私がこの町とのつながりを感じたのは制服を購入した服屋さんだった。まだ入学前だった私に優しく話しかけてくださり、「困ったらいつでもおいで。傘を忘れたら貸してあげるよ。」と言われてとてもうれしくなったことを覚えている。このようにこの町の人々はみんな、地域の隔たりもなく優しく見守り、手助けしてくれる。強い絆があるのだ。

それは、地域の人々だけではない。私が通っている高校の地元の同級生や先輩、先生方も同じだ。この町の観光名所や有名なお店を教えてくれたり、実際に一緒に訪ねたりもした。また、ボランティア活動では地域をきれいにし、いつもお世話になっている恩返しできて、とても幸せな気分になった。

そして、一番驚いたのは「祭り」を通しての人々のつながりだった。この町には全国でも有名な大きな祭りがある。その祭りの運営やみこし、太鼓台等の大部分を、地域の子どもたちも協力して行っていた。昨年初めて見た時、子どもたちも大人の方々と同じように自分の町の伝統行事を誇りに思い、一体となって盛り上げていく姿に感動した。

新しい町の人々のおかげで今は不安が無くなり、この町が大好きになった。きっと、この素晴らしい「つながり」がなかったら、ここまで楽しい高校生活を送ることはできていないと思う。

私が伝えたいことは、今の時代はなかなか地域全体で交流する機会がなく、人と人との温かい関係も少なくなってしまっている。しかし、私はこの町でたくさんの人の温かさに触れることができた。きっとこのような機会が増えれば、もっと活気ある町にできるはずなのだ。

## \* 一般の部 「今、父として」

村松 龍

亡くなった父と同じ年齢になった。

当時、小学校四年生の私と一年生の妹は、突然おそった父の死というものをしっかりと理解できなかったのだろう。ぼんやりと覚えていることは、母の泣いている姿と二人の小さな体を強く抱きしめる震える手だった。父は家族、そして子どもたちに大きな愛をそそいでくれた。仕事がとても忙しかったにもかかわらず、いつも子どもたちと触れ合い、その日にあったできごとをうれしそうに聴いてくれた。あの日も朝食を食べながら、「今日は学校で何があるんだい。」「気をつけて行くなだよ。」といつも変わらず優しく語りかけてくれた。その日の夜に二度と父と話すことができなくなるとは考えてもいなかった。

父は幼い私に対して、「生まれてきてくれてありがとう。」と頻りに話していたことを思い出す。晩婚だった父はことさら子どもに愛情をそそいだという理由だけでなく、幼くして戦争で父を（私の祖父）を亡くしていたこともあり、父子のかかわりを本当に大切にしていたことを後に母から聞いた。

今、自分が父となり、幼い我が子への愛おしさを感じる時、亡くなった父が私にそそいでくれた大きな愛について考える。こんな風に我が子を愛し、健やかな成長を願っていたことを。自分の父への畏敬の念と父親としての理想の姿を。父から子へ、そして、さらにまた子へ愛情や願いが受け継がれていくことを。

あのころの父が将来を思い描いたような人間になっているだろうか。自分の父のような父親になれるだろうか。生まれ育ったふるさとで教員となった今、目の前の幼い我が子に視線を向けながら繰り返し考える。そして、この子と共に成長していきたいと強く感じる。

今、父として無邪気に微笑む幼い我が子へ語りかける。

「生まれてきてくれてありがとう。」

